詩余ものがたり　北宋篇（四）

――清・葉申鄉『本事詞』――

松尾肇子

四十二、秦観の隠し文字

秦観（字は少游）は蔡州にいた時、軍営の芸妓の陶心児に首ったけでした。彼女との別れの時、〔南歌子〕を作りました。

玉の水時計のしずくがぽたりぽたりと垂れ終わり、
銀河があわあわと西に傾いて夜がもうすぐ明ける。
夢から目覚めても二日酔いはまだすっきりとはさめない。
隣の鶏の声に起きろと促され空が明るくなるのが恐ろしい。

肘のあたりに化粧が残り、
襟もとには昨夜の別れの涙がなおもいっぱい。
水辺の灯火は道行く人をみちびき、
空の向こうには残んの月が三つの星を帯びている。

末句は「心」の字を隠しているのでしょう。蘇軾（号は東坡居士）はこの詞を見ると笑って「その姫に別れを切り出されるのがこわいだけだな」と言いました。

秦観にはまた〔水龍吟〕の詞があり、これは軍営の芸妓の婁婉に贈ったものです。婉の小字は東玉と言い、詞の中にはまた「婁婉東玉」の（傍線を引いた）四字が詠み込まれています。

小さな楼閣は庭苑につらなり空にのび、
見下ろせば華やかな車馬が走り過ぎる。
簾を半分巻いて、
単衣に初めて手を通すのは、
清明のころ。
暖かな陽気を破って風が吹き、
晴をからかうように小雨が降り、
止むようで止まない。
花を売る声が向こうへ去り、
しだれ柳の庭に、
花がひとかたまり散り敷き、
鴛鴦模様のれんがで築いた井戸にちりかかる。

身につけた玉の帯玉が丁東と鳴った別れの時、
また会うことの難しさを悲しむ。
名利に縛られた私の心中を、
天がもし知ったならば、

天でさえもやつれるだろう。
花の下の重なる門、
柳がなびく小道の奥、
振り返るに忍びない。
思えば悲しいことに、
あの頃と同じ白い月が、
昔のままに人を照らしているばかり。

四十三、黄庭堅と盼盼

黄庭堅（号は魯直）が瀘州に立ち寄ると、官妓に盼盼という者がいて、瀘州の将軍がたいそう寵愛しておりましたので、黄庭堅は彼女に戯れて〔浣渓紗〕を贈りました。

足元の靴は四寸の薄絹、
唇は紅いサクランボのよう。
何も言わずに秋波を送る。

心の内では宋玉（のような美男の私）を愛しているのに、
ただ楚の襄王（のような将軍）をどうしようもない。
この世であなたと縁があるだろうか。

盼盼も詞をつくることができましたので、その場で〔惜春容〕を歌って酒を注ぎました。

若いとき　花を見た両鬢は黒々として、
馬を章台に走らせて管弦の音を追いかけた。
今や年老いて深い花むらを惜しみ、
一日中花を見ても見足りない。

宴席の美女のかんばせは玉のようで、
私のために一緒に金縷の曲を歌ってくれる。
帰るとき酔っ払って傾いた帽子のつばを抑えると、
頭上を春風が赤い花にさわさわと吹く。

四十四、黄庭堅と幽霊の詞

黄庭堅がかつて荊州の亭に登ったとき、柱に詞を書き付けてあるのを見ました。そこには、次のようにありました

御簾を巻き上げ欄干にもたれて一人たたずんでいる、
山には夕暮れの雲が彼方まで広がっている。
目は涙で潤んで晴れたことがない、
私の故郷は呉と楚の境にある。

数片の雪花がひらひら、
それに驚いて白い鴎がパッと飛び立つ。
この詩が出来上がろうとするとき、
黒いもやにかすむ草むらの中へ落ちて行く。

黄庭堅は悲しみに沈んで「まるで私のために書かれたようだ」と言いました。筆遣いからすると若い女性が書いたようで、「涙で目が潤んで晴れたことがない」の句は、幽霊の言葉かとも思われました。この日の夜、夢に一人の女性が現れ言いました。「私の故郷は豫章の呉城山です。客に従って船旅をしてここまで来ましたが、川に落ちて死んでしまいました。川辺の亭に登って思いが募り、この詞を作り

ました。あなたが私の詞を知ってくれようとは思いもしませんでした。」黄庭堅ははっとして「これはあの呉城の小龍女に違いない」と言いました。黄庭堅は昔招かれた席で、髪を二つに結い上げたばかりの歌姫に会い、祝いの曲を頼まれて、戯れに〔定風波〕を作ってやったのです。その詞というのはこうです。

歌と踊りが終わり 晩の装いの彼女たちが下がっても、
あるじは情を込めてゆっくりしていって下さいと言う。
冠も斜めに被ったまま酔っておいとましようとすると、
お待ちくださいと引き止める、
玉のような人の細くしなやかな手は自然にいい香りがした。

また酒席で楽しく語ることができたならば、
このように、
短い歌を歌って赤いスカートを舞わせよう。
馬が帰りを促し店の戸は閉じ、
人々は眠っても、
夜中の月は憎らしく（眠れぬ私の）寝床を照らすだろう。

四十五、黄庭堅と楊姝

黄庭堅が当塗の長官だった時、楊姝という若い歌妓がいました。琴を弾くのが得意で、黄庭堅は彼女のために〔好事近〕を作りました。

ひとたび弾けばはっとさせる音色、
思いは斜めに寄せたふたつの眉山にとどまる。
昔の人が愁えたところまで弾き到ると、
真珠の涙がまつげにのっている。

長官殿は来るも去るも何の思いもないのだから、
頬に涙の筋をつけてはいけない。
我ながら恨めしいことに年寄りは酒も飲めなくなって、
その真心に添えないのだ。

四十六、黄庭堅と陳湘

黄庭堅が南方に左遷されて、衡陽に立ち寄ると、曾誕（字は敷文）が長官となっており、数日間引き留めました。軍営の歌姫に、陳湘という、歌舞が上手で書にも心得のある者がいました。曾誕もこれに目を掛けており、黄庭堅に小楷の書を請い求めましたところ、彼女のために〔阮郎帰〕を作りました。それは次のようなものです。

しなやかな若い娘は羅敷に似て、
湘江に輝く真珠。
起き上がるとまげを結い櫛をいれ、
化粧をすると書を学ぶ。

歌は姿にかない、
舞は修練のたまもの、
湖南の地に敵う者は無い。
白いひげがいやでなければいつの日か、
一緒に舟に乗って五湖に帰ろう。

別れの時にはまた〔驀山溪〕を送って言いました。

オシドリもカワセミも、

小さくともすばらしい伴侶をと思う。
眉の下には秋波をたたえ、
まるで湖南の、美しい山水。
あでやかになよやかに、
ちょうど十三に余る年頃、
まだすっかり春にはならず、
花の枝は痩せていて、
まさしく愁いの時節。

花を尋ね酒を携えることならば、
他人に遅れはとらないが。
ただ心配なのは 帰ってくるのが遅くなり、
緑はこんもりと陰をなし
青い梅が豆のような実を付けてしまうこと。
心に深く期待しても、
いつも思うようにはならないもの、
宿場の柳を、
あなたは知っているだろうか、
（旅人は）千里離れてもなお振り返ることを。

宜州（ギシュウ）に到着してから、また同じ調の〔驀山溪〕を送って言いました。

咲き乱れるたくさんの花々は、
到るところで人を酔わせる。
林の中の一つの花は、
何もせずとも、人を引きつけ小道を成す桃。
今年の風雨は、
はらわたを断つ紅のその花を散らさず、
斜めの枝に寄り添い、
塵を籠めた風の中にいても、
塵の気配を身にまとわない。

ちょっと怒っているかのようでまた喜んでいるようで、
春の味を少し知っている。
川には帆に愁いを載せた舟、
夢のなかでなおも尋ねるのは、歌と舞。
いまや酒に向かっても、
あの時とは違って、
なんということもなく字を書き、
夢も空しく、
ただ相思の思いがあるばかり。

四十七、張耒（ちょうらい）と劉漱奴（りゅうそうど）

張耒（字は文潛（ぶんせん））がはじめ許州（キョシュウ）の幕官となったとき、軍営の芸妓の劉漱奴を好み、〔少年游〕を作ってやったことがありました。次のようなものです。

羞ずかしげによりかかって笑って歌にならず、
細い手にはよい香りの薄絹のハンカチ。
花によりそい灯に照らされ、
ひそかに深い心を伝え、
酒の後の思いを流し目に込めている。

赤も緑に見えるほど心はまたも乱れ、
遠く見つめあって二つの眉を寄せる。

会える時はまれなのに別れは多く、
また春は過ぎ去り、
この愁いをどうしよう。

後にまた〔秋蕊香〕を作って別れの思いを送りました。

カーテンをそよそよと風がとおり、
一筋の香煙が金の獣がついた香炉から立ちのぼる。
朱い手すりによりかかる黄昏の後、
廊下の空には昼のような月。

別れの味わいは酒のように濃く、
人を痩せさせる。
この情は東隣の家の柳には届かず、
春は毎年昔のまま。

四十八、晁補之と招奴

晁補之（字は无咎）が玉山に左遷された時、道中に徐州を通り、陳師道（字は無己）が折しも里にいたので、挨拶に出向きました。晁補之は彼のために酒を用意し、招奴という若い歌姫に〔梁州〕の曲を舞わせました。そこで陳師道は〔減字木蘭花〕を作って贈りました。その詞は次のようなものです。

あでやかになよやかに、
芍薬の梢の先に紅く小さい。
舞衣の袖が低く垂れ、
心は君のもとに行っていることを客はもう知っている。

金の酒器に玉の酒、
花の前で私に勧め長寿を言祝ぐ。
やめておくれ、
白髪に花かんざしとは恥ずかしい。

四十九、陳師道

世間では陳師道はいつでも正論を言うと言いますが、次のような〔浣渓沙〕があります。

暮れ方の葉に朝の花　とりどりに陳び、
三か月の秋が気遣いして詩人に尋ねる、
雲と雨とを手配するのに新しく清らかなのをお求めか。

思いのままにしばらく馬を走らせ、
軽装の役人は塵にまみれる。
暮れ方の窓辺で誰が思念しているのか　新しい一枝を。

この詞は歌姫に贈った作品で、（原文一句末の陳と二句初の三を結んだ）「陳三」というのは陳師道が自分を言い、（末句の）「念一」は歌姫の名前です。思うに真面目ではないこともあっただけなのでしょう。

五十、晁補之と田氏

廖正一（字は明略）と晁補之とは、元豊年間に一緒に科挙に合格した仲で、最も親密に交際していました。廖正一が通っていた田氏は、美人でした。ある日、廖正一は晁補之を招き、朝早く田氏を訪れまし

た。客が来たというので慌てて起き、鏡に向かって髪を整えますのに、流し目を送ったり話したり、そうそうに髪をとかして、客を接待しました。晁補之は廖正一の親友なので、気持ちはありましたが口に出しては言わず、〔下水船〕を作りました。

賓客が黒馬を繋ごうとしたところ、
驚きいなないたので銀屏風の中で目が覚めた。
眠たげに鏡台によりかかり、
なよなよと今しも豊かなまげを解いている。
鳳のかんざしが落ち、
金の鏡のあたりにひらめく白い指、
巫山に一段の雲が重なるように髪を結い上げる

なかば鏡を覗いて、
私に流し目を送ってくる。
首をかしげて花のかんばせを鏡の中にこもごもに映しだし、
うすくおしろいを掃き、
慌ただしく薄絹をまとい整える。
みどりの眉を整えれば、
心の内にこっそりと秘めた思いはあっても、
空しく川辺で佩玉を解いて贈るしかない。

五十一、秦観

潭州の長官が合江亭で宴会を開いたとき、張庭堅（字は才叔）が座にいて、おおぜいの歌姫たち全員に〔臨江仙〕を歌わせました。一人が「さざ波はまったく動かず、冷たく満天の星を浸している」という二句だけを歌いました。張庭堅は褒め称えて、その曲を全篇歌うように求めましたが、芸妓は「私の住まいは船に近く、月がすがすがしく明るい夜になると、隣の船の若者が帆柱に寄りかかってこの詞を歌うのを見ますが、怨めしく悲しげなのです。ただ私は才能に乏しく、全部は覚えることができません。どうかご列席の皆様はお助けくださり、一緒に行って覚えてくださいませ」と言いますので、長官は願いを聞き入れました。翌晩、皆と一緒に酒を飲んで待っておりました。夜も更け月が静かに冴え渡る頃、果たして隣の船に若者が現れ何度もため息をついてからこの詞を歌うのが聞こえました。趙瓊という妓女がいましたが、じっと聞くうち涙をこぼして「これは秦観様の歌声です」と言いました。趙瓊は歌が上手で、秦観が南方に左遷された時に、趙瓊の歌を聞いて激賞したのでした。そこで人をやって尋ねさせたところ、まさに秦観の霊柩を載せた船でした。その詞の全篇は次のようなものです。

千里の瀟湘は青い浦に流れこむ、
櫂をこいでその昔 通ったのを思い出す。
月は明るく風は静まり露が清らかにおり、
さざ波はまったく動かず、
冷たく満天の星を浸していた。

ひとり危うい手すりに寄りかかり憂いに沈めば、
おりしも川の女神が奏でる冷ややかな瑟の音が聞こえる。
仙界の音色は古今の情をすべて包み込むが、
曲が終わるとその人の姿は見えず、
川辺にはいくつかの峰が青く連なっている。

五十二、王観

王観は、字を通叟といいますが、翰林学士だったある日、お召しに応じて〔清平楽〕を献上しました。英宗の皇后だった宣仁太后は、この詞がなれなれしく行儀が悪いと、王観を遠くに左遷しました。そこで王観は自ら「逐客」と号しました。その詞というのはこのようなものです。

黄金の御殿の中、
灯は二頭の龍が戯れる影を映し出す。
天子様に酒を勧めてすっかり酔わせ、
酒を注ぎながらもなお万歳を唱える。

錦のしとねの上で〔梁州〕を舞い終わると、
天子様は彼女のためにかんざしを整えてやる。
その夜 御前に呼び出されると、
並み居る宮女たちのどれほどが悲しんだことか。

当時この詞を衢州の王仲甫の作だとする人がいましたが、間違いです。

五十三、范温

范温（字は元実）は重々しい人柄で、歌舞の宴席にいても、一日中黙っていました。ある芸妓が彼をからかって、「お殿様はうたをお分かりですかしら」と言いました。范が笑って「僕はあの『山に薄い雲をさっと刷く』（秦観〔満庭芳〕の初句）の娘婿ですよ」と応じましたので、そこにいた人々はこぞって笑いました。

五十四、賀鑄

賀鑄（字は方回）はかってある美人を愛していましたが、別れて長らくたった頃、彼女が詩を送ってきました。

ひとり高い手すりに寄りかかれば 涙が襟を濡らす。
小さな庭に春の色 思い出の場所を尋ねるのも物憂い。
深い恩愛が丁香の結ぼれるのに似て（解けないとして）も、
芭蕉の小さな芯（のような私の心）を開くのは難しい。

賀鑄はそのままその言葉を使って、〔石州引〕を作って答えました。

こぬか雨が降って肌寒く、
斜めに照る日差しは晴れをもてあそび、
春の気配がひろがる。
宿場の柳がようやく黄色く色づき、
遠い旅人が一枝をまず折り取る。
もやは水際によこたわり、
点々と帰って行く白鳥と映り合い、
春風は遠い北の龍沙の雪をすっかり消した。
まだ覚えている 旅立ったのは、
ちょうど今の時節だった。

出発のとき、
美しい高殿で香りのよい酒を飲み、
紅を溶かした涙をこぼしながら清らかに歌ってくれたのに、
にわかに軽々しく別れたのだった。
もう年月を経て
はるかな音信もすっかり絶えてしまった。
小さな胸に、

共にどれだけの愁いを収めているか知りたいと思ったが、
芭蕉は開かず丁香は結ぼれる。
無理にも空の果てまで望み見て、
ふたりは風と月とに愁いに沈む。

五十五、李清照と趙明誠

趙明誠は字を徳甫といいますが、幼いとき、父の趙挺之が嫁を選ぼうとしていました。趙明誠はたまたま昼寝をして、夢の中である本を読みましたが、目が覚めると「言と司とが合い、安の上はすでに脱け、芝芙の草が抜けた」の三句だけを覚えていました。父に話すと、謎解きをしてくれました。「おまえは詞を作れる妻を得るのだな。言と司とが合えば、詞の字だ。安の上が脱けると、女の字だ。芝芙の草が抜けると之夫の二字だ。おまえは『詞女之夫』になるというのではないか。」後に、李格非がめあわせた娘が李清照（号は易安居士）で、そのとおり文学の才能があったのです。結婚してまもなく、趙明誠は遠く旅に出ましたが、李清照はことに別れが辛く、錦のハンカチーフをもとめ、〔一剪梅〕を書きつけて別れに贈りました。

紅い蓮の花の香りも薄れ　玉のむしろに秋がきた、
羅の裳裾を解いて、
ひとり舟に乗る。
雲の中に誰が錦の手紙を送ってきたのか。
雁が字のように連なって帰る時、
月の光は西の高楼に満ちる。

花はひとりでにひらひらと散り　水はひとりでに流れ、
ひとつの恋心、
ふたつの場所で静かに愁う。
この気持ちは消すすべもなく、
やっと眉根を下りたと思ったら、
またも心根に上ってきた。

五十六、李清照の佳句

李清照が重陽の節句を詠じた〔醉花陰〕の詞を趙明誠に送りました。

薄いもや　濃い霧　愁いに長い昼、
香は金の獣のついた香炉で消えてしまった。
めでたい節句　重陽がまたおとずれ、
美しい枕　薄絹のカーテン、
夜中　秋が初めて通り抜けて来た。

東の垣根で酒杯を手にした黄昏の後、
ひそかな香りが袖に満ちる。
悲しんでいないと言わないで。
簾が西風に巻き上げられると、
その人は黄色い菊よりもやせ衰えている。

趙明誠は詞を手にして、これに勝ちたいとおもい、三日間寝る間も惜しんで五十首の詞を作り、李清照の作を混ぜて、陸徳夫に見せました。彼はしばらく吟じながら味わっておりましたが、「『悲しんでいないと言わないで』以下の三句だけが最もよく、そのほかはこれには及ばないね」と言いました。